

文化的価値ある持続可能性への冒険

Adventure of practices for cultural and sustainable values

環境経営学会 理事

Director, Sustainable Management Forum

廣瀬 忠一郎

HIROSE Chuichiro

【キーワード：文明の概念、持続可能性、パラダイム転換、グローバル合意形成】

本文要約：

ホワイトヘッドは『観念の冒険（1933年）』において全編を通じ、文明の促進と保持のための冒険の重要性を強調している。しかし、その後20世紀末までの文明は、彼の言う文明の促進と保持に著しい不適合性を内包しつつ蓄積し、現在その構図は世界を持続可能性の危機に直面させている。それは文明の促進が、文明の保持に常に優先されてきた近代文明習慣の未完性を明らかにする。筆者はその解決の主流は、“文化的価値ある持続可能性”の追求と判断し、ホワイトヘッドの挙げた文明化された社会の5つの徳性「真理、美、芸術、冒険、平安」の意味を再吟味すると共に、それらの徳性の下に持続可能な文明の新たな構図（新パラダイム）を描き直す。これは一つのパラダイム転換であり、その実現に向かう観念の冒険と実践の冒険について、グローバルな合意形成を重視した視点から論じる。

English Abstract :

Whitehead emphasizes throughout in the book, *Adventure of Ideas (1933)*, the importance of Adventure for the promotion and preservation of civilization. However, since then the civilization up till the end of 20th century has contained and accumulated the remarkable incompatibility to the promotion and preservation of civilization. This particular scheme has lead the world confronting with the crisis of its sustainability. This illustrates the incompleteness of customs of modern civilization taking always the precedence of promotion of civilization over its preservation. The author judges that the mainstream of solution to this fact is to pursue the adventure for cultural and sustainable values, reexamining the meaning of five virtues of civilized society——Truth, Beauty, Adventure, Art, Peace, under which redesigning also, a new scheme of sustainable civilization (a new paradigm). This is in fact a conversion of paradigm, for which the author argues about the adventure of ideas and practices from an emphasized viewpoint of global consensus building.

(序) 産業革命から 20 世紀末までの文明は、自然科学や社会科学の飛躍的發展にも関わらず、いわゆる持続可能性に対し、決定的な不適合性を内蔵しつつ蓄積してきた。人間文明にとって、哲学、科学技術、経済制度（資本主義）および政治制度（民主主義）の未完性は永遠の課題であろう。しかし、持続可能性の危機に直面して、この未完性の課題は切迫した喫緊の挑戦である。人口増、途上国の経済開発の進展およびグローバリゼーション等と相俟って、持続可能性問題は解決に時間的制約を持つ意味で、人間の文明史、精神文化史において前例が無い。その解決の主旋律は哲学を含む総合的視力に基づく“文化的価値ある持続可能性”の追求であろう。これは 20 世紀までの文明観や価値観に対し、より高い特質の人間文明の構造を目指すパラダイムへの総合的転換である。

そこで、筆者はホワイトヘッドの「人類史における**観念の冒険**」と、「歴史の冒険を説明するための諸観念の思弁的構図」に立脚し、今求められる「**実践の冒険**」について若干の考察を試みたい。今あらためてホワイトヘッドの文明論による生き生きとした人間の活力を引き出し、理性的に切り開くことが切望される。

その逆に、時間的制約条件の存在を理由に、人間圏を一定の強制的条件下に定常的に固定化（定量・定性的）することは喫緊の選択肢ではあり得ない。それだけでなく、それは常に創造的に前進しようとする人間性の本質に照らして整合的でないであろう。このような状況の中で、筆者は伝統的に自然と社会との関わりを「対立概念」でなく、「関係概念」として重視する文化を持つ日本が、グローバル時代の人間文明社会の「中核」の一つとして発展を計ることが「理念と利害状況の相関」の複雑化する 21 世紀世界において解決困難な諸課題に明るい展望を与えると考える。

(本論) 人間社会の存続は第一義的には宇宙、および地球圏外の太陽系惑星の中心である太陽と地球との物理科学的な関係性を持つ。しかし、地球社会の現実を一般的に観察すると、文明は人間にとって適応可能な地球圏内の自然および社会環境に主として依存して見える。

人類の文明と環境との歴史を振り返ると、古代文明のうちメソポタミア、インダス、ギリシャ・ローマは個々の文明とその社会システム自体が内蔵した環境破壊性（土壌の塩化と沈泥による水路の閉鎖、または家畜の過剰放牧、森林破壊、保水能力の喪失、土壌の侵食等の複合的作用）の拡大と深化を通して崩壊した。18 世紀後半の産業革命以降の西欧の工業経済社会は、自然資源の採取と開発を国内外で行いつつ、政治的、社会的諸革命を経て、工業生産、商業および交易に基づく資本主義・市場経済社会という近代文明システムを発展させ、それを非西欧世界にも漸進的に普及させた。それは 1990 年代の米ソ冷戦の終焉と情報技術の進展によっていわゆるグローバリゼーションの流れに展開し、地球全域に急速に浸透する究極の段階に到達している。

しかし 21 世紀の現代文明社会が直面する地球環境危機は、また新たに姿を変えた“文明につきまとう環境破壊性”の内在と蓄積を警告している。その代表的なものに、現代文明社会のエネルギー使用が絶えず排出する温室効果ガスに伴う地球温暖化問題が挙げられる。

IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change:気候変動に関する政府間パネル、地球温暖化に関する科学的研究の収集、整理のための学術的政府間機構) は世界に関する客観的・科学的見解として2007年第4次評価報告書で温室効果ガスの急増を気候変動問題の主因としてほぼ結論づけた。その他の環境危機では産業・生活廃棄物質の及ぼす自然環境の破壊、生態系の悪化による生物多様性の喪失などがある。これらは食料と水の供給問題はじめ様々な深刻な影響をグローバル社会に発生させ、ついに人間文明と地球環境の調和した持続可能性を脅かす水準に至った。21世紀の人間文明社会にとって持続可能性問題とは、20世紀までの文明習慣に内在する持続不可能な主要部を根本的に解体し、創造的に再構築するパラダイム転換の課題である。

ホワイトヘッドの有機体の哲学に基づく文明論によれば、文明化された社会は5つの徳性「真理、美、芸術、冒険、平安」を持ち、その冒険は**観念の冒険**と**実践の冒険**に分けられる。平安とは文明の観念から、文明につきまとうエゴイズムを排除し、その他の4つの徳性を結びつける<諸調和の調和>であるという。筆者はこれらの文明化された社会の5つの徳性が、人間社会の「文化的価値としての持続可能性」を集散的に成立させる普遍的理念であると再認識する。本稿は以上の認識に立ち、その解決に向かって**観念の冒険**と、**実践の冒険**への道程を思索する。それらは人間文明のうち、人間の生のみを意味あるものにしようとする自己中心的部分を改め、本来、価値中立的な地球環境に調和した発展性を確保する試みである。そこで現実の持続可能性を巡る本質的諸課題を個別に分析し、以下のような俯瞰の構図に纏める。続いて20世紀先進諸国文明の非持続可能な主要部に対しその実践的解決について考察する。

最後に、グローバル化された人間社会の普遍的理念と、グローバルな集合的合意形成の可能性について論究する。そのため「共生主権」という概念を創り、真に崇高な意味における開かれた知識情報公開と透明性に基づく新しいグローバルな“参加民主主義”が、最も合理的かつ効率的に新しい文明パラダイムの再構築による平安(諸調和の調和)を可能にすることを論証したい。つまり、20世紀文明の主要な理念と原則を持続可能な発展の視座から省察し、新しい物質文明観と精神文化に基づくグローバルな21世紀人間社会の観念構造を思索してみたい。

1. ホワイトヘッドの文明の徳性に準拠した現代文明の本質的課題と2つの冒険の俯瞰

| | 本質的課題 | 観念の冒険 | 実践の冒険 |
|-----|-----------|-----------|------------|
| | 現行パラダイム特性 | 新パラダイム | |
| ①真理 | | | |
| 人権 | 人間中心主義 | 持続可能な人権概念 | 共生の尊厳への転換 |
| 資本 | 資本概念の狭隘性 | 持続可能な資本概念 | 持続可能性資本の確立 |

②美

| | | | |
|----|------------|-----------|------------|
| 自由 | 人間中心の自由思想 | 持続可能な自由概念 | 活発だが責任ある自由 |
| 平等 | 既得権・発展権の反目 | 持続可能な平等概念 | 共通だが差異ある責任 |

③冒険

| | | | |
|----|-----------|------------|-----------|
| 科学 | 自由原則の科学 | 持続可能性責任の科学 | 拡大・探究責任科学 |
| 技術 | 狭隘な目的論の技術 | 責任ある技術 | 拡大・応用責任技術 |

④芸術

| | | | |
|------|------------|-----------|-------------|
| 資本主義 | 資本主義の不完全性 | 持続可能な資本主義 | 外部不経済の内部化 |
| 市場経済 | 自由主義の生産と消費 | 持続可能な市場経済 | 持続可能性の市場価値化 |

⑤平和

| | | | |
|-------|------------|------------|--------------|
| 民主主義 | 民主主義の未完性 | 持続可能な民主主義 | 共生主権の民主主義 |
| 法の支配 | 法による支配の未完性 | 持続可能な法の理念 | 人権と環境の統合的法理念 |
| 文明価値観 | 文明進歩観の未完性 | 持続可能な文明進歩観 | 文化的価値ある持続可能性 |

(注記1) ここでの持続可能性とは、地球上における個人、民族、国家、国際社会あるいはグローバル社会での人間の生の意味を見きわめ、価値あるものにしようとする主体としての人間およびその人間文明の存続可能性である。しかし、それは人間存在に対し本来、価値中立的な人間外の地球環境自体との共生の持続可能性を含む。

(注記2) 5つの文明徳性に個別に組み合わせた人間文明の諸思想、原則および制度は、筆者が本稿の目的のために説明上最適と信ずる選択配分を採用した。上記以外の組み合わせ選択も可能である。例えば、人権を②美に帰属させることもできる。ただし、それらの議論は他の機会に譲りたい。

2. 時間的制約条件下にある持続可能性問題とグローバル社会の合意形成

世界に関する客観的・科学的知見として IPCC の第4次評価報告書が指摘するように、現在の持続可能性の危機は グローバル人間社会が“2050年までの時間制約条件付きの”前進的かつ確実に行動すべき計画課題の遂行を警告している。これはグローバルな人間文明社会が歴史上初めて全地球規模で集合的に直面する失敗の許されない挑戦である。しかも、この未曾有の挑戦は、世界人口の短期急増(現在65億から今世紀末90億人へ)とその主因である発展途上国の経済成長の緊要性という不可避な歴史的付帯条件を伴っている。21世紀と言う歴史過程を引き継ぐ知的生命体としての人間社会は、20世紀文明システムの根幹からの見直しと、それらの主要原理のパラダイム転換を差異著しい諸社会間で同時並行的に時間的制約条件内に遂行しなければならない。

前掲の現代文明の未完性の分析俯瞰図により、筆者は21世紀人間文明の持続可能性危機が解決に向かうに不可欠な主要社会システムの新理念とその実践要件の概観を提示した。これらは20世紀までの文明観に基づく主要な既成概念を聖域無く個別に解体し、新たに人間社会の持続可能な発展の視座からそれらを統合し一体的に再構築することが緊要であることを表している。

その際、重要な視点は、文明の未完性の分析俯瞰図における5つの徳性、本質的諸課題および2つの冒険課題の全てが相互に、人間社会と自然環境の時空間を超える共生概念との関わりを持つことである。人間の冒険は科学または技術による介入を中心として人間社会だけでなく自己の存在する地球環境にも歴史的に絶えず関与してきた。従って、その過去、現在、未来の主体者である人間社会は、5つの文明徳性の普遍性を調和的に持続させるため、人間の生と存在の基盤である人間システムと自然環境システムについて、透徹した知的理解を高度に追求し共有しなければならない。グローバル社会の合意形成とは、意志的主体である“人間”間の知性的客観性についての課題である。しかし、その合意形成には、個人、民族、宗教、および文明国家として差異ある主体者（グローバル社会における差異ある市民）の自然環境との融和に関する感覚、認識、知性、および理性に訴える広範な知識情報とコミュニケーションが不可欠だからである。

例えば「平和」の下に掲げた「民主主義」と「法の支配」はその他全ての文明理念と関係している。「共生主権の民主主義」とは、個人としての「人間の尊厳」理念のみならず、自然環境を含む「共生の尊厳」理念を規準とする。その共生とは、人間と人間、人間と自然、人間と人工物、自然と人工物等の関係性の中に調和して初めて可能である。これらの関係性は常に人間文明の持続可能な発展にいずれも密接に繋がっている。その「共生主権の民主主義」は人間のみ参加する伝統的な議会制民主主義でなく、本質的に自然も人間社会の文明制度に理念的に参画させることを要請する。選挙権も発言権も持たない「自然」が人間の理性を媒介として人間社会に参加する場合、持続可能な民主主義は初めて担保される。端的に言えば、人間中心主義に立脚し自然環境を“外部化”して来たこれまでの民主主義は、文明社会の持続可能性に照らして未完性のままに制度化されていたと判定される。

（結語）本文においては、現代文明社会の「平和」についてだけでなく、その他「真理」、「美」、「冒険」、「芸術」に示した諸課題についても、全て聖域無く、持続可能な人間文明のために究明を試みる。限られた時間的制約条件のある、持続可能性問題解決への“参加民主主義”にとって必要な諸行動は、真の意味で合目的かつ実効的でなければならないからである。それに関わる知識情報公開と情報透明性に重大な“欠如”があれば、持続可能性の危機を不必要に悪化させ、その知性と理性の不完全性は実効的な連帯行動の全体に必ず不調和と不適合をもたらすであろう。逼迫する持続可能性の危機解決にあたり、知識情報共有の枢要性は、人間文明の発展の成果としての人口増加が“知性と理性”という資源の集約的な連帯と貢献とを有機的に強化しグローバルな合意形成を促進することにある。

人間文明の持続可能性の問題を、ホワイトヘッドの有機体の哲学と文明論に即して考察すると、次の2点に集約されよう。第一に5つの文明徳性を21世紀人間文明の持続可能性に適合する観念（知性的および理性的客観性）と実践（文明習慣の合目的改変）に同調化し有機的に発展させることである。第2に現存する人間社会の意志的主体が個人、国家、地域連合および国際社会等に分散化され、グローバルな文化的価値ある持続可能性という統合的理念に比較し、狭小な諸社会秩序の下に不調和に散在している文明状況の改革である。そのため、この2課題を学際的諸学の視座から考察し、併せて哲学そのものの問題としても、意志的主体性と知性的客観性とをホワイトヘッドの有機体の哲学で接合することを試みたい。それは個人としてのみならず、グローバル社会という集合体として、地球環境の総体を有機的自己と認識する価値観への革新を要求する。更に、それは「諸調和の調和」を個人およびグローバル社会という集合的主体者に内在させることに繋がる。それらと適応する方向に、文明社会の発展は、科学技術、経済制度、政治制度分野などにおいて変容することが要求される。

しかし、現在の65億人のグローバル社会を適時に秩序ある新パラダイムに再構築することは、一定数の優れた知性的な指導者およびグローバル社会の支配的多数の市民が、文化的価値ある持続可能性概念を真に実効的に共有することから始まる。しかも、この基本的かつ容易でない行動が、実は必要最小限の最初の変革である。本文ではそれらを5つの徳性ごとに分析し、できるだけホワイトヘッドの有機体の哲学に照らして論究したい。

Adventure of Practices for Cultural and Sustainable Values

International Whitehead Conference October 26, 2008

C. Hirose

[FIVE VIRTUES]

[ESSENTIAL PROBLEMS]

[ADVENTURE OF IDEAS]

[ADVENTURE OF PRACTICES]

Characteristics of current paradigm

New paradigm

New paradigm

1 Truth (Truth as Humanity & Capital)

Human Rights

Anthropocentrism

Development of Sustainable Human Rights

1.1 Transformation of Dignity of Human to Dignity of Being-Together

Development of Sustainable Capital Concept

1.2 Foundation of Sustainable-Capital Concept beyond Production-Capital

2 Beauty (Beauty as Planetary Social Order)

Freedom

Narrowness of Concept of Capital

2.1 Proactive but Responsible Freedom for Sustainability

Equality

Anthropocentric Concept of Freedom

2.2 Equality under Common but Differentiated Responsibility for Sustainability

3 Adventure (Adventure as Sustainable Human Curiosity)

Science

Discord of vested & development rights

3.1 Extended Responsibility of Science in accordance with Earth's Sustainability.

Technology

Freedom-oriented Science

3.2 Extended Responsibility of Technology in accordance with Earth's Sustainability

4 Art (Art as Human System of Subsistence)

Capitalism

Narrowness of Teleological Technology

4.1 Internalization of Diseconomy into Capitalism

Market Economy

Incompleteness of Capitalism

4.2 Market-Economy by rule of Market-Value of Sustainability

5 Peace (Peace as Human System of Living Together)

Democracy

Freedom of of Production & Consumption

5.1 Participative Democracy under Sovereignty of Being-Together

Rule by Law

Incomplete Concept of Democracy

5.2 Integration of Jurisprudence of Human and Environmental Rights

Sense of values

Incomplete Concept of Progress

5.3 Establishment of Concept of Cultural & Sustainable Values

Note1 : The term 'sustainability' means the sustainability of human civilization as well as the one shared by man with value-neutral nature.

Note2 : The above classification of current characteristics of paradigm with the five virtues of civilization is allocated at the discretion of the author. But, other alternatives of allocation classified to five virtues can be made. This argument is left aside for future opportunity.